

原 著

Thomas Hardy の詩 “The Chosen” に描かれた 理想の女性像

橘 智 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 5 年 3 月 31 日受理)

On an Ideal Woman in Thomas Hardy's Poem “The Chosen”

Tomoko TACHIBANA

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Mar. 31, 1993)*

Key words : Thomas Hardy, idealization, love, well-beloved, ideal woman

Abstract

“The Chosen” is a somewhat grotesque and fantastic narrative poem in which the hero has been caught in a kind of spell by his idealization for women.

Though he looks like a Don Juan, he has sought to find only an ideal in many women. After having been involved with five women, one after another, he finally finds “A woman for whom great gods might strive”, but she is nothing but his realization of woman.

In this essay, I intend to read this poem as an allegory and infer the sixth woman, whose face changes into those of the five women, is not actual but a phantom; that is, she is a ghostly blend of five women. This poem suggests an ideal woman may be created by being blended from five women, but that it is impossible to find such an ideal woman in this world.

要 約

「選ばれし女性たち」は、やや怪気的な幻想風の物語詩である。主人公の回想によって過去に五人の女性との不毛の恋愛を匂わせながら、実は唯一人の理想の女性を希求しての観念的な愛の遍歴である。つまり女性に対する自我理想の投影と追求であり、永遠に満たされな

い結果的ドンファン物語である。

この小論では、五人の女性の顔が融合して変容する六番目の「理想の女性」が現実のものではなく、男性の idealization による幻影であるとして捉え、五人が合体して始めて「究極の女性」になりうるとの比喩の観点からこの詩を論じる。

はじめに

Hardy は英国の伝統的叙情詩人 (Chaucer から Shakespeare を経て Wordsworth, Shelley, Keats に至る) の流れをくむ詩人であることから short lyrics が秀作と見なされている。しかし, J. Gibson が「Hardy の詩の特徴は narrative poetry (物語詩) である」¹⁾とか, Carl J. Weber が「Hardy の詩の四分の一以上が物話風に構成された詩である」²⁾とか指摘しているように, Hardy 独自の詩形 —— ballad form・narrative form —— を駆使して、多くの物語詩を dramatic に演出することで成功している。これは Hardy の詩の題材が極めて平凡で生々しい日常生活と赤裸々な人間の行為からとられているだけに narrative form がテーマに適し、その内容を一層効果的に描写出来るからであろう。

この小論で取り上げる“The Chosen”³⁾は、ややゴシック風で、幻想的な物語詩である。詩のテーマは、理想像の崩壊による幻滅の愛をうたっている。ここでは、同じテーマで書かれたとされる Hardy 最後の小説 *The Well-Beloved* (恋魂) と、詩で同じ題名の “The Well-Beloved”⁴⁾ (愛人) から引用参照し、その共通点を勘案しながら、この詩に六人目の女性が配飾され、登場した意味と比喩的役割を考察してみたい。

1

Hardy が 8 冊の詩集に収めて上梓した 918 篇のうちで love poem が 400 余篇にのぼることから、彼が如何に愛と女性に深い関心を持っていたかが推量出来る。しかし Hardy ほど酷で、宿命的で、ビクトリア朝時代ではタブー視された猥らな愛をテーマに作詩した詩人は少ないと思う。

Hardy は人間の愛とか結婚を romantic に描かず、現実在るがままの姿を直視し、数多くの愛の断面を写實的に描いている。そして人間の

愛が内包する本質とその矛盾、愛の可能な限りの発展とその営みの限界を極限状況の中で展開させ、愛の不確かさや欠陥、不信や破局を哀感^{ビティ}をこめてユーモラスに、時には、皮肉^{アイロニー}をこめて冷淡に作詩している。しかしその裏面には、愛の誠実さ、愛の不滅へのあくなき願望が秘められているように思われる。Hardy 自身、余りにも純粋化した愛と理想像を、生身の女性に求めたようである。そしてその度合いが強ければ強いほど、愛の幻滅と悲哀は計り知れないものがあつたに違いないと思われる。加えて、最初の妻・エマとの不幸な結婚生活での絶望感は、彼の作品に描かれている登場人物の語りや心情を通して窺い知ることが可能である。

Hardy はこのような idealization (理想化) について次のようにコメントしている。

It is incompleteness that is loved, when love is sterling and true. That is *what differentiates the real one from the imaginary*, the practicable from the impossible, the love who returns the kiss from the Vision that melts away. *A man sees the Diana or the Venus in his Beloved, but what he loves is the difference.*⁵⁾

(Italics mine)

つまり、男性は恋人に理想化した想像上の人格を投影し、その虚像を実像と錯覚して、「理想の女性」と思い込み愛するのである。しかし実体に触れ生活をともにし、内実を知るにつれ自分の錯覚に気付いた瞬間、愛は消え失せ、そこには幻滅と愛したことへの嫌悪と罪悪感が残される。Hardy は、お互いに或いは一方的に実体を理解しないまま理想化し過ぎるために悲劇に至るこの種の成り行きを数多くの小説でも描いている。例えば *The Return of the Native* (帰郷) における Eustacia と Clym や、*Tess of*

the d'Urbervilles (ダーバビル家のテス) における Angel と Tess の愛の破局・結婚生活の破綻、そして死に結びつく悲劇的結末などがその例である。

それでは “The Chosen” の中で主人公の「私」なるナレーターが idealization にとりつかれたまま、女性遍歴を重ねた結果、得たものは何であったか。その悲喜劇とも思える成り行きを見ていくことにしよう。ここに全詩と拙訳をかかげ、小論を試みることにする。

2

THE CHOSEN

“Ατινά ἐστὶν ἀλληγορούμενα”

“A WOMAN for whom great gods might strive”

I said, and kissed her there;
And then I thought of the other five,
And of how charms outwear.

I thought of the first with her eating eyes,
And I thought of the second with hers, green-gray
And I thought of the third, experienced, wise,
And I thought of the fourth who sang all day.

And I thought of the fifth, whom I'd called a jade
And I thought of them all, tear-fraught;
And that each had shown her a passable maid,
Yet not of the favour sought.

So I traced these words on the bark of a beech
Just at the falling of the mast:
“After scanning five; yes, each and each,
I've found the woman desired — at last!”

“—— I feel a strange benumbing spell,
As one ill-wished!” said she.
And soon it seemed that something fell
Was starving her love for me.

“I feel some curse. O, *five* were there?”
And wanly she swerved, and went away.
I followed sick: night numbed the air.

And dark the mournful moorland lay.

I cried: “O darling, turn your head!”

But never her face I viewed;
“O turn, O turn!” again I said,
And miserably pursued.

At length I came to a Christ-cross stone
Which she had passed without discern;
And I knelt upon the leaves there strown,
And prayed aloud that she might turn.

I rose, and looked; and turn she did;
I cried, “My heart revives!”
“Look more,” she said. I looked as bid;
Her face was all the five's.

All the five women, clear come back,
I saw in her — with her made one,
The while she drooped upon the track,
And her frail term seemed well-nigh run.

She'd half forgot me in her change;
“Who are you? Won't you say
Who you may be, you man so strange,
Following since yesterday?”

I took the composite form she was,
And carried her to an arbour small,
Not passion-moved, but even because
In one I could atone to all.

And there she lies, and there I tend,
Till my life's threads unwind,
A various womanhood in blend —
Not one, but all combined.

選ばれし女性たち

「この物語は比喻として読む」

1. 「大いなる神々も 熱望し手に入れたがった女性よ！」
と私は言い 彼女に接吻した
その時五人の女性たちを思い浮べて

なぜに女の色香は 褪^あせるものかと思った

2. 食い入るような目をした 最初の女性を思い
緑がかった目をした 二番目の女性を思い
まろやかな世智と分別の 三番目の女性を思い
終日 歌っていた 四番目の女性を思った
3. さらに「やせ馬」と呼んでいた 五番目の女性を思い
そのはてに 五人の女性皆のことを思って 涙溢れた
それぞれに かなりの女性たちであったが
私が求める 女の美質には程遠かった
4. そこで木実^{このみ}を落とし始めたばかりのブナの樹皮に
こんな言葉を刻み込んだ
「五人の女性に求愛し 一人一人を見極めて
やっと 意に叶った女性を見つけた」と
5. 「わたくし身も心も萎えて 不気味な呪^{じゆも}を感じます
呪^{じゆも}詠^{じゆも}された人のようにです」と 彼女が訴えた
やがて 今に何か恐ろしい物の怪が
私への彼女の愛を枯死させようとするかのようにだった
6. 「わたくし 恨みを感じます まあ 五人もいらっしたの？」
彼女は蒼ざめて 急に向きを変え つと立ち去っていく
私は落胆し 後を追った
夜陰は 大気をかじかみ 悲しげな荒地が黒々と横たわっていた
7. 私は叫んだ 「ああ最愛^{いととし}の女性よ 振り向いてください！」
でも 彼女は 振り返らなかった
「ねえ こちらを ああ こっちを見て下さい」
何度も叫びつつ みじめな心で後を追って行った
8. やがて 彼女が それと気付かず通り過ぎた
十字架の碑の所に たどり着き
私は 舞い散った 落葉の上に膝まづき
振り向いてくれるように 声を出して祈った。
9. 祈りから立ち上がりつつ 見ると 彼女はこちらを向いていた
私の声ははずんだ 「私の望みが再び叶った！」
「もっと わたくしを 御覧になって下さい」 彼女の言うままに 見詰めると
その顔は 全く 五人の女性の顔だった
10. 表情には 五人の 面影が一つなりに

ありありとよみがえっていた
その間 彼女は道端でうなだれ 力を無くし
はかない命は絶え絶えになるかに見えた

11. この容態のなかで 私のことも忘れかけ
「どなたなの？ あなたって とても変な男性^{ひと}
昨日からでしょう わたくしをつけまわしていらして
まだ どなたか おっしゃらないつもりなの？」
12. 私は 五人の女性がこれほどまでに融合した体を抱き上げ
小さな「あずまや」へと 運んだ
情熱の発露としてではなく 一人の女性で
他のみんなの罪滅^はしを したいがためであった
13. 彼女はそこに 横たわり 私は命の糸が
解けるまで 一人ではなく
皆が結合し 溶け合った
さまざまな女性を ここで 看取る

3

この詩は、13連からなる4行詩で脚韻はa b a b、強勢は2通りで、奇数連は4—3—4—3であり、偶数連は詩行がすべて長いために、4—4—4—4となっていて、リズムはtriple rising⁶⁾である。語り口は、男性の回想シーンではnarrative monologue、男女の会話はdramatic dialogueである。52行の詩であるが、女性の語りは僅か7行に過ぎず、女性の存在感の希薄さがこの世のものでないファンタムを思わせる。

Hardyはこの詩のエピグラフにギリシャ語で“Hatina Estin Allegorousmena”⁷⁾（この物語は全て比喻である）と付記している。Hardyが意図的に追記したのか、引用好きなHardyが軽い気持で書き加えたのか定かではない。しかしNorman Pageが“… he (= Hardy) is doing what he can to discourage the reading of the poems as personal documents.”⁸⁾と述べているように彼は詩をpersonal documentsとして読まれたくなかったのであろう。と言うのも、Baileyが指摘する通り、Hardy学者の中には、彼の手紙、日記、イラスト、写真などを詳しく調べて、Hardyの本質を洞察したいとする——つまり

詩を自伝的資料として読もうとする傾向があるからである⁹⁾。“The Chosen”でも詩の中で暗示されている五人の女性の特徴から推測し、加えて Hardy がこの中の四人の女性に結婚を申し込んだとされる事実をふまえた上で自叙伝的な詩として鑑賞する人たちもいる。例えば Lois Deacon はこのように推測し、立証している¹⁰⁾。最初の女性の “eating eyes” から、目の大きい Florence Emily (Hardy の二度目の妻)；二番目の女性の “green-gray” から、緑色の目の人には赤毛が多い事実をふまえ、赤毛であった Elizabeth Browne (Hardy より 2, 3 歳年下で獵場番人の娘)；三番目の女性 “experienced, wise” から、Mary Waight (Hardy より 7 歳年上で、そのために彼のプロポーズを拒絶したとされる女性)；四番目の女性 “who sang all day” から Emma Lavinia (Hardy の最初の妻で、歌うのが好きであった。そして Emma の死後 Hardy が彼女のために書いたとされる “To a Lady Playing and Singing in the Morning”¹¹⁾の中で “Joyful lady, sing!” と Emma をほのめかしていることから)；五番目の女性は “Jade” という呼びかけから従妹の Tryphena Sparks (Hardy が Emma と結婚する前に婚約していた。Tryphena の死後、彼女に捧げるソネットの一つ “She, to Him”¹²⁾の中で、彼女に “poor jade” と呼びかけていることから本人と推定されている)。しかし、どこまで信ぴょう性があるかは議論の分かれるところである。従って、私は “Hatina Estin Allegoroumena” の通りにこの詩をアレゴリーとして読む。たとえ Hardy 個人の経験から引き出されたもので自伝的要素が濃いものであるとしても、野口雨情が「本当に良い詩とは、作者の名が忘れられても、世に残る詩」と言っているように、Hardy 個人を離れて、詩そのものの持つテーマを把握し、総合的・包摂的^{ほうせつ}な情感・底流に流れる思想を受けとめ、比喩としての持ち味・個性を感じ取る方が興味深いと思えるのである。

さて、各連を略解しながら詩の内容を考察していくことにする。

4

1 連の最初の行で、“A woman for whom great Gods might strive” との呼びかけに、どんな理想の女性像が描かれ、賛美されるのかと読者の期待は大きいのだが、女性に対する描写も存在感も皆無であり、2 行では、男の神々を引きあいに出し大上段から積極的に行為が行なわれ、3 行では究極の女性にめぐり合った歓喜も謳い上げられないまま、過去に捨てた五人の女性を思い出し、最後の行では、今この瞬間の恋を前向きに、現実・具体の女性との情感を進展させればよいものを、過去になずみ、恋に覚めた人の言う至極当然の独白を並べ、今回も成就しない恋の成り行きを暗示して、読者に失望感と不安感を抱かせる。

2 連・3 連では、五人の女性を一人一人思い出すことで、過去の五人の女性との不毛の愛を浮き彫りにする。それぞれの女性の一部分だけをとりえて描写することで、個性の異なる様々な女性との恋愛を匂わせながら 3 連の最後の 2 行で “And that each had shown her *a passable maid*,/Yet not of the favour sought” (Italics mine) と「まずまずの女性」であったが「女性の美質」をそなえた理想の女性ではなかったと回想している。この心情を Hardy は *The Well-Beloved* の主人公で芸術家の Pierston に「究極の女性」を求める男性の悲哀と重ねて、このように代弁させている。

She was a blonde, a brunette, tall petite, svelte, straight-featured, full, curvilinear. Only one quality remained unalterable: *her instability of tenure*.¹³⁾

(Italics mine)

To have been always following *a phantom whom I saw in woman after woman* while she was at a distance, but vanishing away on close approach was bad enough.¹⁴⁾

(Italics mine)

金髪だったり、黒髪だったり、大柄だったり、小柄だったり…と言った色とりどりの女性の体

に次々と移り住む「恋魂」を追い求めるのだが、“her instability of tenure”とあるように「恋魂」はどの女性にも長居せず、不定期に場所を変えるのである。また遠くからは理想の恋人に見えた女性も近づいてみると、それは幻影にすぎず、たちまち消え失せてしまい幻滅すると嘆いている。この詩の主人公もこれに似た心情であったのだろう。気がついてみると五人もの女性との出会いと別れを繰り返していたのである。

これは、恋愛対象として絶えず女性の愛を希求しながら、自らの描いた理想的な愛の聖像を捨て得ないために起きることであり、女性に対する自我理想の投影と恋慕の深さであり、永遠に満たされることのない結果的ドン・ファン型と言えるものであろうか。

さて、1連の最初の2行は、4連の3・4行へとつながり、男性はブナの樹皮に“After scanning five ; yes, each and each, I've found the woman desired — at last!”と刻み、希求してやまなかった「理想の女性」をやっと見付けた歓喜を表明している。しかしこの言葉を刻んだブナの木は“the falling of the mast”と実が落ち始めたところから、晩秋から冬への季節の移り変わりにこめられた冬枯れへのイメージと“falling”という言葉に実らない愛のイメージが重ねられて、二人の愛の前途は不透明であり暗い予感である。また、その間、連れの女性が、少年じみた樹への彫刻作業に専念する男性の一人よがりやをどう見ていたのであろうか。これに対する反応として、5連・6連で女性の心裏を見せている。女性が初めて口にしたのは、男性の歓びに溢れた宣言口調とは対照的に“I feel a strange benumbing spell, as one ill-wished!”と、不吉な呪いの予感であって、決して愛される喜びも幸せも謳っていない。当時の女性たちの因襲的抑圧と眠らされていた知性は、呪いとか不安を受け易く、主人公である男性も、五人とのかかわりの中で繰り返し味わった愛の終末時の不安を感じ始めている。

“O, five were there?”と男性に五人もの女性がいたことに女は青ざめて立ち去って行く。Hardyにしては珍らしい描き方である。と言うのも、女性の過去に恋人がいたとなると、例外

なく女性を捨て去るのが男性側であり、数多くの作品に別れのシーンとして描写されているからである。*A pair of Blue Eyes*のHenry Knightとか、*Tess of the d'Urbervilles*のAngel Clareがよい例である。自分の愛する女性はバージンでなければならない。キスも初めてでなければならないし、相手の女性は必ずそうであるとの身勝手なidealizationから脱し切れないための悲劇である。

7連では、男性が“O darling, turn your head!”と叫びながら女性を追いかけが振り向かない。しかし“But never her face I viewed”の1行は推測すると、9連につながる伏線と思われる。遂に女性が振り向いた時、“Her face was all the fives”と彼女の顔が五人の女性の顔になっていたからである。この辺りから詩の幻想性は更に強まり、怪氣的傾向を帯びてくる。六番目の「究極の女性」の具象的な描写が実写されなかっただけでなく、ここに来て「理想の女性」には顔がなかったのである。顔のない女性に乗り移った五人の女性の顔が不気味に読者に迫ってくる。そして表層では、やっと見付けたと思った「完璧な女性」が、その五人に生気を吸い取られ、意識は混濁し、命もはてかけてくる。読者の深層では、何とか五人の女性の顔を一つに合成して主人公と共にはっきりした像を結び、六番目の女性に生きて欲しいと願うのだが具現せず、バーチャル・リアリティの技法に習熟する現代の若者でもいら立って来ることと思われる。

つまり最初から「理想の女性」は現実には存在せず、主人公の心の中にのみ存在していたのではないだろうか。男性は六人目の女性を求めながら常に五人の女性に対する潜在的な罪の意識を持ち続けていたのであろう。五人の女性の複合体である衰弱した一人の体を「あづまや」へ運ぶ理由を12連で“Not passion-moved, but even because/In one I could atone at all”と六番目の一人を通して五人皆の罪滅ぼしをするためと言っていることから、3連で謎めいていた“tear-fraught”の意味が明らかになり、男性の贖罪的気持を推察することが出来る。12連まで、ナレーションの部分は全て過去形であったが、13連で現在形になっているのは、男性の心

の中で過去と現在の行き方の訣別、そして何よりも idealization からの訣別を示唆している。結局誰とも結ばれることなく、過去の様々な女性に対する罪滅ぼしのために “Till my life's threads unwind” と余生を捧げることを決意し、五人の女性への鎮魂歌としている。と同時に長い期間自分の心の中に同居していた idealization の追放と、その呪いからの脱却でもある。それは、過去からの呪縛が作用する限り男女に限らず幻滅の悲哀を繰り返し味わう運命にあるからである。

小説 *The Well-Beloved* の中では、詩中の男性と同じように idealization に呪われて、たえず「恋魂」を追いかけていた Pierston が、恋の最終結末で熱病にかかり、治癒した時、物の怪が落ちたように「恋魂」から解放される。その当座は愕然とするが、「ああ、有難い、呪いが解けた」と回心する。そして別れていた妻に「愛することは出来ないが、友情は死に至るまで」と、再び同居し、社会福祉事業に専心するのである。この詩においても、男性のキリスト教的な精神的風貌と、家父長制度の色合いの濃さが、最終的な結末のつけ方として似通っている。男性が性愛を感じ、それを経てなお残るものがあるとすれば、女性への保護本能なのであろうか。

む す び

連を追って“The Chosen”を概観してみると、男性が理想の女性と思いこみ、希求して止まない相手は、幻影にすぎないという比喻であろう。また現実の女性には求められないものを幻想の世界では満たされるというのであろうか。幻想の世界と現実の世界の狭間を行き来して、あり得ないことと知りながらなお求めざるを得ない孤独さと永遠の愛への渴望が感じられる。

同じテーマである “The Well-Beloved” でも “... She is the God-created norm/Of Perfect womankind!” と、言って恋人を「完全な女性」と見る。これも男性の心に描く理想像への呼びかけであり、久遠の愛への渴仰である。それを暗示するように、恋人の姿をした幻影が語り聞かせる。

O fatuous, this truth infer,
Brides are not what they seem ;
Thou lovest what thou dreamest her ;
I am thy very dream! (St. 13)

.....

“My loved one, I must wed with thee
If what thou sayest be true!” (St. 14)

.....

I have ever stood as bride to groom,
I wed no mortal man!” (St. 15)
(Italics mine)

大意は「愚かな男性たちよ、花嫁たちは見かけと実体は違うのです。あなたが愛し理想とする花嫁は、心の中で描いている幻影にすぎないのです。そして私はまさにあなたの幻影です」と男に告げると、次の連で男が「僕は君と結婚しなければ」と言う言葉を受けて、幻影は「私は人間とは結婚出来ない」と言って消えて行く。つまり現実の生活では幻影を愛すること、理想像を求めすぎること是不幸であり、悲劇でさえあることを暗示している。

さて、“The Chosen”の六番目の女性は、男性の心の中に描いた幻影にすぎなかった。しかも五人の女性が融合した女性と言うことは、一人では、不完全だが数人の様々な女性が合一すれば、やっと理想の女性・完全な女性になりうると言うのであろうか。Southworth が

A man of experience, for example, frequently wants too much ; he wants all women in one. He seeks for one person that will be his perfect complement ; that will play the Cleopatra to his Antony¹⁵⁾

(Italics mine)

とコメントしている通り、人間の欲望は果しないものである。それ故に人間は生ある限り愛の希求と渴望から解放されず、愛に永遠性と誠実さを求め続けるのである。

Hardy はこのように愛し、傷つき、幻滅し絶望する出会いと別離を描き続け、人が愛し求めてさ迷う繰り返しの中で、なお一時の愉悦と哀感

に満たされる様を見過ごさず——愛と性を人間永遠のテーマとして追求した小説家であり詩人である。

現代の feminism の観点からこれらの作品を考察すれば、男性の身勝手な論理だと批難されるかも知れない。しかし Hardy は公平を期してか、或いは女性の性の自由と解放を願ってか、*The Well-Beloved* の中で二十歳の娘にこのように告白させている。

‘Then I will tell you,’ she said quite seriously. ‘Tis because I get tired of my lovers as soon as I get to know them well. What I see in one young man for a while soon leaves him and goes into another yonder, and I follow, and then what I admire fades out of him and

springs up somewhere else ; and so I follow on, and never fix to one. I have loved *fifteen* a’ ready! Yes, fifteen, I am almost ashamed to say,’ she repeated, laughing. ‘I can’t help it, sir, I assure you.’¹⁶⁾

大意は「恋人のことがよく分かった途端、すぐにあいてしまう。一人の青年にしばらく心引かれるが、嫌になり、また別の青年に走り、追いかけるが、相手の魅力は消えてしまうこの繰返しに、今までにもう15人愛した」と言うのである。男女にかかわらず、「意に叶う理想の男性・理想の女性」を希求するのは自然の感情であり、強い願望であり、果されない夢だと、Hardy は比喩的に語っているのであろう。

文 献

- 1) James Gibson and Trever Johnson (1985) *Thomas Hardy : Poems*. Macmillan, London, pp 266.
- 2) Carl J. Weber (1967) *Hardy of Wessex*. Columbia Univ. Press, p. 281.
- 3) Thomas Hardy (1962) *The Collected Poems of Thomas Hardy*. Macmillan, London, pp 640.
- 4) Ibid., p. 121.
- 5) Florence Emily Hardy (1962) *The Life of Thomas Hardy*. Macmillan, London, pp 239.
- 6) Elizabeth Cathcart Hickson (1972) *The Versification of Thomas Hardy*. Folcroft Library Editions, pp 22.
- 7) The Bible (1989) Galatians 4 : 24 「ガラテヤ人への手紙」 pp 298 「この物語は比喩としてみられる」より引用。
- 8) Norman Page (1974) *Thomas Hardy*. Routledge & Kegan Paul, London, Henely and Boston, pp. 168.
- 9) Ibid., pp 167.
- 10) J. Stevens Cox, ed. (1968) *Thomas Hardy : Materials for a study of his life, time and works* (Lois Deacon (1966) *The Chosen by Thomas Hardy*), The Toucan Press, 1.
- 11) Thomas Hardy (1962) *The Collected Poems of Thomas Hardy*. pp 548.
- 12) Ibid., pp 13.
- 13) Thomas Hardy (1987) *The Well-Beloved*. Macmillan, London, pp 77.
- 14) Ibid., pp 9.
- 15) James G. Southworth (1974) *The Poetry of Thomas Hardy*. Harvard Univ. Press, pp 60.
- 16) Thomas Hardy (1897) *The Well-Beloved*. pp 73.